

私も自分でラストの場所を選べる人生にしたい。そのために、今、ゆいまあるとついでこの場所で、利用者さん、職員、みんなの選べる人生の為に力を尽くしていきたいと思っています。まだまだ未熟者ですが、地域の皆さんと一緒に成長していきたいらと思しますので、よろしくお願いたします。

※当法人は2022年4月より、**奥村まほろ**を新たな事業統括MGMとし、**岩崎直美**がゆいまあるヘルパーステーションの管理者に昇格する新体制に移行しました。

## 会員・読者のひろば

新年号での八幡理事長からの呼びかけにより、利用者様の戦争体験の寄稿がありました。ボランティアのオカリナ秋桜さんからの「意見と併せ、ご紹介します。」

### 金田満智枝さん(中央町)

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まりました。私は昭和9年生まれですので小学校一年生でしたが、子供には分かりませんでした。戦争が激しくなり四年生の時に学童疎開を群馬県水上に致しました。最初は遠足気分でしたが次第に食糧事情も悪くなり、主食はじゃが芋かさつま芋でした。一年二か月後、終戦になり東京へ帰りました。板橋第八小学校でしたが母、姉、兄が静岡へ疎開してそこで空襲に合い焼け出されておりましたが残しておいた荷物を取りに静岡から東京板橋に来ました時に、私も疎開先から帰ってきましたので、一緒に静岡に行きました。その後、軍人だった父が中国より復員しました。東京で勤め始めましたので、やっと家族一緒に世田谷に家を買って住むことが出来ました。

惨い戦争は本当にいやですね。昔の思い出を記してみました。

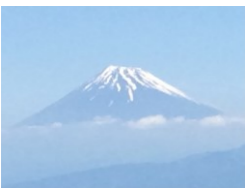
### 秋山美代子さん(大門町)

昭和4年、私が生まれ、間もなく東京の病院勤務をしていた父が静岡の沼津に病院を建てるところになり、母と姉、私を連れ東京から沼津に越し、昭和6年に中西病院を開業しました。その後、第二人が

生まれ七人家族となりました。

### 昭和20年7月15日

夕飯が終わった頃(ブーッと一定の音がなる)警戒警報が鳴り出しました。急いで部屋の電灯に黒いカバーをかけ真下だけ明るくしました。でも間もなく(ウーウーと上下音)空襲警報が鳴り始めました。急ぎ庭に拵えた職人に掘らせ(「L」字型の防空壕に父母、弟三人と私が飛び込みました。姉は廊下に居て、近くに落ちた爆弾の爆風で庭に飛ばされ防空壕で合流しました。空襲警報は長々と続き鳴り止まず「これは敵機が多いぞ危ない」と父が申し、母と弟二人、父と姉と熱があつた弟(父が自転車に乗せて)と私、の二方に分かれ(両親が一度にやられたら困るので)走り、私達は街中から大分離れた所にあつた四人堀という屋根のない大きな丸い穴へ逃げ、体を丸くしてしゃがみました。大勢の人達が入りました。この穴の中にも焼夷弾が落ちました。「誰かお医者さんはいませんか」と声がありました。父は何も持たず逃げたので他をみる余裕はありませんでした。夜が明けて集合場所に決めていた千本松原へ向かいました。誰かが「奥さん達いますよ」と声をかけてくれ母達と合流できました。朝になって自宅へ向かいました。二階建ての病院は近所では目立つ洋館の建物でしたが焼けてしまい、五右衛門風呂の釜以外全く何もありませんでした。私のピアノもピアノ線だけが黒く見えました。地下室があり、さしあつての着替えや布団などが無事だったのを確認し、そこを放っておけなかつたので父は焼けた廃材を集めそこに六畳程のバラック小屋を作りました。そこに七人で住むのです。トイレは焼け残ったスコップで穴を掘り2枚の板を渡しただけ、周りを廃材で囲みみしました。お天気がよく晴天が続いたので幸いでした。弟三人の小中学校も全くありません、私の母校、沼津高女も全部焼けました。見渡す限り灰のような町です。そこに一週間居住しました。富士山だけは同じ姿で下を見下ろして見ました。敗戦まであと一ヶ月のことでした。



### オカリナ秋桜代表 村上幸子さん

届きました「ゆいまある」新年号を隅から隅まで読ませていただきました。まず紙面の色合いがやさしく、文字も大きくはつきり目に入り、イラストが心をほっこりと温かくしてくれました。

思い返しますと、私たちオカリナ秋桜が訪問しましたのが「ゆいまあるはちまん」様が最初で、2013年12月のことでした。迎えてくださった皆様の笑顔は、今でも目に浮かんできます。「安里屋コンサート」の演奏の時には沖縄出身の方が踊ってくれました。2019年まで23回訪問致しました。ゆいまある南沢様にも5回伺いました。

それがコロナでお会い出来なくなり、寂しいですね。利用者様、職員の皆様には大変お世話になりました。皆様には大変お変わりございませんか？必ずまた訪問出来る日が来ることを祈りながら、それまで私達も楽しい曲を練習しておきます。どうぞ皆様、コロナに負けないように、気持ちを引き締めて、乗り切って、いつかは普通の毎日が戻ります事を念じております。



### 退職された米山咲子さんからの寄稿



介護保険制度のスタートと同時にケアマネとして働き始め、多くの方々との出会いがありました。出会った方々に育てられ、家族にも育てられ、現在の私があります。

時には理不尽とも思えることに落ち込むこともありましたが、自分を待っている人がいることは嬉しく、人生の最終章に関われる事への感謝の気持ちを忘れてはいけなかったと思います。

ケアマネとして心掛けたことは、生活の中でどんな些細なことでも「良かった！」と思ってもらえる場面を一回でも多く作ること、そしてその人の人生を受け入れることでした。

高齢化が進むとともに、病气や障害を持つ人が増え、介護保険制度への期待は高まるばかり、けれども見直しのたびに複雑になり、利用者・家族・介護労働者に混乱を与えることが多くありました。そして圧倒的な介護人材不足…。

基本理念を置き去りにすることなく、働く人が希望を持てる制度にするには…課題ですね。

「ゆいまある」は言葉のひびきと同じで、まあるく温かな職場でした。NPO 法人ゆいまあるも、時にはトラブルを抱えながら、ヒヤヒヤ、ドキドキ、ヤツタネ！を繰り返し、大きくなってきました。

これからも支え合いのバトンが繋がっていくことで、この街で安心して暮らし続けられることを願っています。(ケアマネ部に所属 2022年1月31日退職)

## 新入職員紹介

12月から4月までに本採用が決まった職員を、アンケート方式でご紹介します。



ヘルプ部 近藤紀江さん  
2022年5月1日日本採用

介護の仕事について思うことは？

介護のお仕事について私自身は利用者様ひとりひとりがその人らしい生活を送っていける日々のお手伝いをしていくこと、また沢山の高齢の方々と接していく中で自分自身の成長を感じられる素敵なお仕事です。

十年度の私はこうありたい！と思うことは？

今までお仕事で携わってきた沢山の皆様との日々の中で得た経験を活かして多くの方のより良い生活のお手伝いをしていきたいです。